

# タイ語文献について (4)

—諸地方の Phongsawadan—

石 井 米 雄

(1.1) Phongsawadan という語には、屢々 “Annals”, “Chronicles” などという訳語が与えられているが、この語を冠して行われている各種の書物を照合してみるとその内容はまことに多岐にわたり、一語をもってこの語の意味するすべてを覆わしめることには若干問題がある。

Phongsawadan の中には各種の史料を批判的に駆使して、科学的な歴史記述を目指したものもあれば (たとえば Phraya Prachatitčhakṛačhak の *Phongsawadan Yonok*, 後述 4. 1 参照), 神話伝説の雑多な寄せ集めにすぎない *Phongsawadan Nūa* (後述 5. 1) のようなものもある。原本の体裁についてみても、著者、著作年代共に不明の貝多羅葉本のこともあれば (*Phongsawadan Mūang Lan Chang* 後述 6. 2. 4), 匪賊討伐のため辺境に赴いた軍隊の指揮官から中央政府に送る上申書の附属文書として作成された一種の報告で、その作成のいきさつ、作成者、材料の提供者の官職氏名、作成の場所等きわめて微細に亘る記録がなされているという場合もある。(たとえば, *Rūang Phongsawadan Mūang Hua Phan Ha Thang Hok*, 後述 6. 6.) 叙述の形式についても, *Phraratcha Phongsawadan Krung Kao* における詳述本 (Chabap phit-sadan) のような詳細な編年体の場合もあれば<sup>1)</sup> (たとえば, *Phongsawadan Muang Luang Phrabang*, 後述 6. 4), 占星家の暦日記 -pum hon- の部類に属する略述本で日付と事件の羅列に止まっている場合もある。( *Phongsawadan Yḡ Mūang, Wiangchan*, 後述 6. 2. 8)

(1.2) Phongsawadan という語を辞書についてみると、まず B.E. 2470 年 (1927) の *Pathanukrom* では「氏族の系譜についての記述」との一義しか与えられていなかったものが<sup>2)</sup> B.E. 2493 年 (1950) の *Photčhananukrom* においては「国若しくは国の元首たる国王に関連して生起した事件についての記述」<sup>3)</sup> とやや外延の拡大が見られる。以上の二種の辞書はいずれも官撰の辞書であるが、仏歴 2504 年 (1961) バンコックの良心的出版社 Phrae Phitthaya 書店が編纂出版し、私家本ながら好評を博している Phrae Phitthaya 版 *Photčhananukrom* では Phongsawadan に三義をみとめ、この語を「(1)歴史 (Prawattisat), (2)氏族の系譜

1) 拙稿「タイ語文献について」(2)『東南アジア研究』第 2 巻第 1 号, 1964 年 9 月 p. 13 f.

2) Krom Tamra Krasuang Thammakan, *Pathanukrom*, Bangkok, B.E. 2470. p.483, r.

3) Ratchabanditsathan, *Photčhananukrom*. 2nd. ed. Bangkok, B.E. 2498. p. 634, 1.

についての記述, (3)国もしくは国王に関する事件についての記述」であると規定している<sup>4)</sup>

(2.1) タイにおける文献の刊行が Nangsū Chaek という特殊な形態をとりつつ発達して来たということは<sup>5)</sup>, とにもなおさず書籍の出版が社会的地位の比較的高い人, 資産家の死亡などというきわめて不確定な要因に依存して来たことを意味し, 従って全集とか叢書のような一貫した方針と計画の下に長期に亘って刊行されるべき継続的出版物が出にくいという事情の存したことは事実である。しかし今その対象を歴史書, 古典文学などの分野にしばってみると, Nangsū Čhaek への材料提供者は, 実際にはそのほとんどが芸術局, 国立図書館などに限られてしまうため, もし時間の要素さえ考慮に入れなければ, これらの機関の指導統制の下に Nangsū Čhaek の形式をとりながらも, 系統的な全集, 叢書等の刊行を行うことは可能であるし, また現実に行われ又は行われつつある事例のいくつかをかぞえることができる。

(2.2) こうした Nangsū Chaek 形式の叢書のうち, 史料として最も重要なものの一つに未完結の *Prachum Phongsawadan* がある。これを直訳すれば「年代記集成」ということになるがこの場合の Phongsawadan は, 上述した広義の Phongsawadan よりもさらに多義で, およそタイの歴史に関係あるすべての文献の集大成を目指しており, むしろ「史料集成」という訳語の方が内容を適切に表現しているものと言えよう<sup>6)</sup>。

「史料集成」は<sup>7)</sup> Damrong 親王の首唱でタイに関する史料の集大成を目的として計画されたものと言われ<sup>8)</sup>, 仏歴2457年(1914) Mōm Čhao Danaiwōranut の葬儀の引出物としてその第1巻が印刷頒布されて以来1964年末までの50年間にすでに79巻が刊行されている<sup>9)</sup>。本稿においては前号までに試みた *Pharatcha Phongsawadan* の紹介に引き続き, 各地方史, 年代記の類を, この「史料集成」の中から抽出し紹介してみたい。「史料集成」の中には *Phongsawadan* の名を冠する書物の外 *tamnan* (歴史) および *khamhaikan* (聞き書きないし証言録) と呼ばれるものをも含まれているが, 地方史として分類しうる内容のものであればそれをも合せとりあげることとする。なお各書物の標題の Phongsawadan という語には便宜上すべて「年代記」

4) Borisat "Phrae Phitthaya", *Photčhananukrom* Bangkok, B.E. 2504. p. 904, 1.

5) 拙稿「タイ語文献について」(1)『東南アジア研究』第4号, 1964年6月, pp. 2~12.

6) "A Compendium of Historical Material" という訳語を与えている人もいる。(cf. A.B. Griswold の論文 "Thoughts on a centenary" 末尾の編集者の Note. *Journal of the Siam Society* (JSS), Vol. LII, pt 1, 1964. p.55.

7) Klaus Wenk による第76巻までの全巻の紹介が行われており極めて便利である。

Klaus Wenk, "Prachum Phongsawadān, ein Beitrag zur Bibliographie der thailändischen historischen Quellen", *Oriens Extremus*, year 9, pt. 2. December 1962. pp. 232~257. 註6に掲げた JSS 所収の Griswold 論文にも *Prachum Phongsawadan* についての紹介がある。且同論文末尾の Note の筆者 D は Wenk の上記論文脱稿後に刊行された第77巻につき補筆紹介している。

8) Griswold, op. cit., p. 22 および, 第70巻によせた芸術局の序文 ("Kham nam", *Prachum Phongsawadan Phak thi 70: Ruang Mūang Nakhon Čhampasak*. B.E. 2484.) 参照。

9) 最近バンコクの Kao Na 書店からこの「史料集成」の商業ベースによる出版が計画され, すでに十数巻が刊行されている。Nangsū Čhaek で既刊分の完揃本を入手することが極めて困難である現状では本刊行計画はタイ史研究者にとって正に福音というべく, 是非共完結させたいものである。

なる訳語をあてておくが、上述のとおり場合により必ずしもこの語が均一の内容を表わさぬものであることをあらかじめお断りしておきたい。

(3.1) 「史料集成」の中には現在までに地方年代記乃至地方史の カテゴリーに入るべきものとして下記の53点の文献が集録されたている。

- (A) 北タイ：西ラーオ関係（チャオプラヤー河上流地域）
  - 1. *Phongsawadan Yonok*
  - 2. *Rūang Ratchawongpakon, Phongsawadan Mūang Nan*
  - 3. *Phongsawadan Mūang Ngoen Yang Chiang Saen*
  - 4. *Tamnan Singhanawat Kuman*
  - 5. *Phongsawadan Chiang Mai*
  - 6. *Tamnan Mūang Suwanna Khom Kham*
- (B) 中部タイ関係
  - 7. *Phongsawadan Nūa*
- (C) 東北タイ：東ラーオ関連地域（メー・コーン河流域の諸地方をよびその関連地方）
  - 8. *Phongsawadan Hua Mūang Monthon Isan*
  - 9. *Phongsawadan Čhampasak*
  - 10. *Tamnan Mūang Čhampasak*
  - 11. *Tamnan Mūang Nakhon Čhampasak*
  - 12. *Nithan Khun Baromaracha, Phongsawadan Mūang Lan Chang*
  - 13. *Phongsawadan Mūang Yasothon*
  - 14. *Tamnan Mūang Saifong*
  - 15. *Tamnan Mūang Phuan 2 chabap*
  - 16. *Phongsawadan Yø Wiangčhan 2 chabap*
  - 17. *Rūang sang Wat Phra Kaeo Si Chiang Mai*
  - 18. *Prawat Thao Suwø Čhao Mūang Nongkhai*
  - 19. *Khamhaikan Phraya Mūang Ham, Rūang Mūang Chiang Taeng*
  - 20. *Khamhaikan Phra Kamhaeng Phonsak, Rūang Mūang Chiang Taeng*
  - 21. *Khamhaikan Thao Løng, Rūang Mūang Attapū*
  - 22. *Khamhaikan Phraratchawitborirak, Rūang Mūang Saphangphupha*
  - 23. *Khamhaikan Luang Thiam, Rūang Mūang Se Lamphao*
  - 24. *Phongsawadan Mūang Nakhonphanom Sangkhep*
  - 25. *Tamnan Mūang Wangmon*
  - 26. *Phongsawadan Mūang Munlapamok*

27. *Phongsawadan Lan Chang*
  28. *Phongsawadan Mūang Luang Phrabang*
  29. *Phongsawadan Mūang Luang Phrabang*
  30. *Phongsawadan Mūang Hua Phan Ha Thang Hok*
  31. *Phongsawadan Mūang Chiang Rung*
  32. *Phongsawadan Mūang Lai*
  33. *Phongsawadan Mūang Thaeng*
  34. *Phongsawadan Mūang Chiang Khaeng*
- (D) 南タイ及び旧マレイ属領
35. *Phongsawadan Mūang Nakhonsithammarat*
  36. *Phongsawadan Mūang Songkhla*
  37. *Phongsawadan Mūang Songkhla*
  38. *Phongsawadan Mūang Pattani*
  39. *Phongsawadan Mūang Phatthalung*
  40. *Phongsawadan Mūang Phatthalung*
  41. *Tamnan Mūang Ranong*
  42. *Phongsawadan Mūang Thalang*
  43. *Phongsawadan Mūang Kalantan*
  44. *Phongsawadan Mūang Trangganu*
  45. *Phongsawadan Mūang Saiburi*
- (E) カンボディア関係
46. *Phongsawadan Kamen*
  47. *Phongsawadan Kamen yang Yō*
  48. *Phongsawadan Mūang Lawaek*
  49. *Phongsawadan Lawaek*
  50. *Phongsawadan Mūang Phratabong*
- (F) モーン関係
51. *Phongsawadan Møn Phama*
- (G) 安南関係
52. *Phongsawadan Yuan*
  53. *Rūang Phongsawadan Yuan*

上記の各書につき以下に簡単な解説を加えることとしたい。

- (4.1) *Phongsawadan Yonok* または *Phongsawadan Lao Chiang*. (ヨーノック年代

記またはラーオ・チェン年代記) 第5巻所収. B.E. 2460本, pp. 81~232. Phraya Prachakit-  
čhakōračhak (Chaem Bunnak) が1899年に撰述した西ラオ諸国(ランナータイ)史。すぐれ  
た著書として夙に定評がある。全体を次の6章に分っている。

第1章 タイ族の起原,

第2章 ランナータイへの定着,

第3章 メンライ王のチェンマイ奠都

第4章 チェンマイ王国年代記,

第5章 ビルマ隷属時代のチェンマイ王国年代記,

第6章 南方タイに併合後のチェンマイ

本書はのち1908年増補改訂され *Ruang Phongsawadan Yonok* (584p) の標題の下に独立の  
一書として出版された。

著者 Phraya Prachakitčhakōračhak は増補版の序文において、本書をしるす上に典拠とし  
た史料として次の17点の文献(北タイ方言, ラーオ語乃至パーリ語)を挙げているがこの中に  
は本稿において触れていないものが多数含まれているので参考までに記しておく。

1. *Tamnan Mūang Suwanna Khom Kham*<sup>10)</sup>
2. *Tamnan (chū) Singhanawat*<sup>11)</sup>
3. *Tamnan Mūang Hariphunchai lae Čhamathewiwong*<sup>12)</sup>
4. *Tamnan Hiran Nakhon Chiang Saen*
5. *Tamnan Phingkhawong*
6. *Chinakalamalini Phongsawadan Mūang Chiang Mai*<sup>13)</sup>
7. *Tamnan Mūang Phuyao*
8. *Tamnan Chiang Rai*
9. *Tamnan Mūang Nan*
10. *Tamnan Phrathat Dqi Tung*
11. *Phra That Suthep*
12. *Phra Thato Lampang*
13. *Tamnan Phrakaeo*<sup>14)</sup>
14. *Tamnan Phra Sing*<sup>15)</sup>

10) cf. "Chronique de Suvanna Khamdeng", M. Camille Notton, *Annales du Siam, première partie*. Paris, 1926. pp.1-80.

11) cf. "Chronique de Sinhanavati" *ibid.*, pp.141-202.

12) cf. G. Coedès, "Documents sur l'histoire politique et religieuse du Laos occidental". *BEFEO* 25, 1925. p.1-200. Camille Notton, "Chronique de Lanphum, Histoire de la Dynastie Chamt'evi". *Annales du Siam, II<sup>e</sup> volume*. Paris 1930. 68p.

13) cf. G. Coedès, *op.*, cit.

14) cf. Camille Notton, *The Chronicle of the emerald Buddha*. 2nd impression. Bangkok, 1933. xi-52 p.

15) Camille Notton, *P'ra Buddha Sihing*. Bangkok, 1933. ix-58 p.

15. *Tamnan Phra Kaen Čhan*

16. *Tamnan Phraphutthasikkhi*

17. *Tamnan Phračhao Luang Thung Iang Mūang Phayao*

(4.2) *Rūang Ratchawongpakon, Phongsawadan Mūang Nan* (王統記, ナン年代記)。第10巻所収。B.E. 2461本, pp.1~210。本書は Mūang Nan の土侯 Phračhao Suriyaphong Pharitdet (1831~1918) が Saen Luang Ratchasomphan をして撰述せしめた「ナン年代記」である。編集者 Prince Damrong の序文によると、本書はもともと北タイ方言で録されたものでやや読みにくいことが難とされるが、原文尊重の建前から方言形をほとんどそのままの形で保存し意義不通と思われる字句については巻末の Glossary でこれを説明し読者の便をはかっている。パーリ語年代記等によったと思われる上古の物語から19世紀の末葉に及ぶ間のナン史の概要を示してくれる。

(4.3) *Phongsawadan Ngoen Yang Chiang Saen* (チェンセン年代記) 第61巻所収 B.E. 2479 本, pp.1~55)

(4.4) *Tamnan Singhanawat Kuman* (シンハナワットクマーン年代記) 第61巻所収。B.E. 2479本, pp.56~208.

上記の2本は北タイ方言で記載された写本に基いて出版された年代記で、同種の写本は未だ評価を加えられぬまま多数バンコックの国立図書館および国立博物館に所蔵されているという。上記の2書はいずれもチェンセン史およびスコタイ王国成立前の隣接諸国の歴史に言及している。これらの記述の中に史実を確定する作業は今後へのこされた課題であるといえよう<sup>16)</sup>。

(4.5) *Phongsawadan Mūang Nakhon Chiang Mai* (チェンマイ年代記)。第3巻所収。B.E. 2471本, pp. 74~112. 1875年のちの Phraya Maha Ammatayabodi (Run) 当時の Phraya Sisinghathep が、5世王の命をうけて撰述した「チェンマイ年代記」。1767年のビルマ軍の侵入から1867年に至る約110年間のランナータイ史である。チェンマイのみならずランプーン、ランパーンの土侯についても言及している。

(4.6) *Tamnan Mūang Suwanna Khom Kham* (スワンナ・コーム・カム史)。第72巻所収。B.E. 250本, pp.1~67。原本は北タイ方言で書かれており、芸術局の手で標準語(バンコック方言)に翻訳され「史料集成」におさめられた。本書は tamnan と呼ばれているが、ここでは「歴史」という意味よりむしろこの語の本源的な用法「口碑・伝説」の意味に用いられている<sup>17)</sup>。スワンナ・コーム・カムなる地名も、クロームルアン (Krōm Luang) と呼ばれ

16) Klaus Wenk, op. cit., p.252.

17) Tamnan はたとえば *Tamnan Phutthačhedi Sayam*, B.E. 2469 (1926) [*A history of Buddhist Monuments in Siam*] などのように最近では「歴史」を意味する用法が優勢であるが、この語の用法は「口伝」「伝説」を意味する方がより本源的である。(Photčhananukrom にも rūang rao nomnan thi to pak kan ma とある。p.414.1.) 本書の序文にも「これは単なる tamnan であって、遺跡などの物的証拠による裏付けを得ていない」とあることによってもここに言う tamnan が「口碑」「伝説」の意であることが知られよう。なお Tamnan の語義については Mrs. Chadin Flood より有益な教示を受けた。

る民族の土地といわれ、スワンナプーミのいづこかに位していたというのが詳細は不明。

(5.1) 「史料集成」に集録された地方史には中部タイの *müang* に言及したものが比較的少い。次の *Phongsawadan Nūa* は中部タイの北辺地方を扱ったものである。

*Phongsawadan Nūa* (北方年代記)。第1巻所収。B.E. 2499本, pp.1~112. 小歴1169年卯年・第9年(1807年) Phrawichianpricha (Nqi) が, Krom Phraratchawang Bqwon Sathan Mongkhon すなわちのちの2世王の命を受けて撰述した年代記で, Müang Satchanalai, Müang Sawankhalok の建設から Uthong 侯の Ayutthaya 建設までを叙述している。しかし内容を検討してみると各種の伝承などを全く無秩序に綴り合せたものと思われるふしがある。初版は1869年に *Tamnan Phra Kaeo Morakot* (玉仏伝) と合せて上木されたが, 「史料集成」におさめられるにあたり, Prince Damrong が重複した部分を削除し, 小見出しを付したという<sup>18)</sup>。本書は早くも1850年に Pallegoix によって紹介されているが<sup>19)</sup>, のち1939年 Camille Notlon の手で全訳された<sup>20)</sup>。

(6.0) 東ラーオすなわちメーコーン河流域地方およびその関連地域 (Sip Song Chu Thai 地方など) については下記の文献がある。

(6.1) *Phongsawadan Hua Müang Monthon Isan* (イサーン州年代記)。第4巻所収。B.E. 2458本, pp. 29~222. Isan とは現在東北タイ全域の総称として広く用いられている語であるが, ここにいう Monthon Isan とはかつて全国を20州に分けていた時代のイサーン州を意味し, Ubon Ratchathani, Kemarat, Yasothon, Khukhan, Sisaket, Detudom, Roi-et, Mahasarakham, Kalasin, Kumlasin, Suwannaphum, Surin, Sangkha, Čhampasak の14の *müang* を含む地方を指す。本年代記の著者 Mqm Amqrawongwičhit は内務省を官を奉じた篤学の士で自ら進んで僻遠の地イサーンに赴き長期に亘って滞在し, ついに任地に歿するまでの間, 公務の余暇をさいては各種の文献の渉猟に努め「イサーン州年代記」を執筆, ある程度まとまるとこれをバンコックへ送って Prince Damrong の校閲を仰いでいたものでこれが死後編纂され一書を成したのが本書である。17世紀~19世紀末葉までの記述を含む。巻末におさめられた Het Songkhram rawang Frangset (「対仏紛争記録」 pp. 201~222) は1893年のメーコーン紛争の事件日誌であり事件の一当事者の手になる記録として尊重すべき史料といえよう。

(6.2) 「史料集成」の第70巻は東北タイ研究者の手引書として編纂されたもので, 東ラーオ関係の各種文献を広く収録しており参照に便利である。以下この巻所収の文献の各々につき略述する。なお頁数は B.E 2484本による。

18) 同書序文 p.vi(čhq).

19) D.J. Bapt. Pallegoix, *Grammatica linguae Thai*. Bangkok, 1850. p.158ff.

20) Camille Notton, *Légendes sur le Siam et le Cambodge*. [Annales du Siam, IV<sup>eme</sup> Volume]. Bangkok, 1939. 115p.

(6.2.1) *Phongsawadan Čhampasak* (チャンパサック年代記). pp. 1~23. Phraya Amatayabdi が撰述し、5世王に献上した「チャンパサック年代記」。

(6.2.2) *Tamnan Mūang Nakhon Čhampasak* (チャンパサック史) pp. 24~46. 前掲 6.1の「イサーン州年代記」の著者 Mōm Amqrawongwičhit (M.R. Pathom Khanečhon) による「チャンパサック史」。

(6.2.3) *Tamnan Mūang Nakhon Čhamparak* (チャンパサック史). pp. 47~70. 1861年 第4世王が時の録事局長 (Čhao Krom Phra Alak) Phra Sunthqrawohan, Ubon の土侯 Phromthewanukhrq らに命じて撰述せしめたチャンパサック史。主としてチャンパサックにおける仏教の興隆につき述べたものである。

(6.2.4) *Nithan Rūang Khun Baromaracha, Phongsawadan Mūang Lan Chang.* (バロム王伝, ラーンチャーン年代記) pp. 71~132. 図書国立館員 Nai Sut Sisomwong の手で貝多羅葉から活字にうつされた伝説上の人物 Khun Baromaracha 王伝。

(6.2.5) *Phongsawadan Mūang Yasothon* (ヤソートーン年代起) pp. 133~152. Yasothon は現 Ubon 県 Yasothon 郡。小歴1259 (1895) に書かれたものと思われるが著者不詳。簡略ながら1893年の対仏紛争当時のかの地の模様についても触れている。

(6.2.6) *Tamnan Mūang Saifong* (サーイフオーン史). pp. 153~169. Mūang Saifong は Wiang Čhan (Vientiane) の南 Nongkhai の北に位置するメーコーン河左岸の廃邑。原本は見多羅葉に刻されたもの。

(6.2.7) *Tamnan Mūang Phuan 2 chabap* (プァン史2巻) pp. 170~174. および pp. 175~181 Mūang Phuan とは Mūang Chiang Khwang, Chiang Kham などを中心とするメーコーン河の左岸地方 (Tran-Ninh)<sup>21)</sup> をさす。著者、著作年代共に不詳。

(6.2.8) *Phongsawadau Yq Mūang Wiang Čhan.* (ウィエンチャン年代記略) pp. 182~204. 小歴1255年 (1893), Čhao Kattiya の作成したいわゆる “Pum Hon” (古星家用暦日記) 様式の略本年代記。

(6.2.9) *Rūang sang Wat Phra Kaeo Si Chiang Mai* (シーチェンマイ, プラケオ寺建立記) pp. 205~211. Si Chiang Mai は北タイの Chiang Mai とは別の東北タイメーコーン河で沿った小色で Wiang Čhan の対岸タイ領内に位している。

(6.2.10) *Prawat Thao Suwq Čhao Mūang Nong Khai.* (ノンカイ侯タオ・スラオー伝) pp. 212~213. Nong Khai 侯 Thao Suwq の略歴。

(6.2.11) *Khamhaikan Phraya Mūang Ham, Rūang Mūang Chiang Taeng* (チェン・テューンに関する プラヤーハームの証言。) pp. 214~216. 小歴1248年 (1896) Mūang  
21) cf. *Guides Madrolle, Indochine du Nord.* Paris, 1925. p.308

Chiang Taeng において Mūang Ham のことにつき土侯 Phraya Mūang Ham に諮問した記録。

(6.2.12) *Khamhaikan Phra Kamhaeng Phonsak, Rūang Mūang Taeng* (チェン・テーンに関するプラカムヘン・ポンサックの証言) pp. 217~219. 1886年 Phra Kambaeng Phonsak Chiang Taeng において行なった Chiang Taeng に関する証言の記録。

(6.2.13) *Khamhaikan Thao Lọng, Rūan Mūang Attapū.* (アタプーに関するターオ・ローンの証言) pp. 220~228. Attapū の Upahat Phrasuwannawongsa Thao Lọng の行った Attapū に関する証言。Attapū は南ラオス Boloven 高原の東南端、メーコンの支流 Se Kong, Se Kamane 両河の合流点にある町。

(6.2.14) *Khamhaikan Phraratchawitborirak, Rūang Mūang Saphangphupha.* (サパンプーパーに関するプララーチャウイトボーリラックの証言) pp. 229~230. 1886年の Mūang Saphangphuha 土侯 Phraratchabōrirak が Mūang Taeng において行なった Mūang Saphanghuphe に関する証言。

(6.2.15) *Khamhaikan Luang Thiam, Rūang Mūang Se Lamphao* (セー・ランパオに関するルアン・ティエムの証言) pp. 231~236 1886年 Mūang Tharabōriwat において Luang Thiam, Nai Owan, Nai Kaeo の3名の行った Mūang Se Lamphao に関する証言。

以上5編の Khamhaikan (証言録乃至聞き書き) はいづれも内務省所蔵の原本によるもので、言及されている Mūang はすべて南ラオス、メーコン河の左岸パークセー (Pak Se) 周辺の小邑である。

(6.2.16) *Phongsawaden Mūang Nakhon Phanom Sangkhep* (ナコーンパノム年代記略) pp. 237~246. Phraya Čhanngonkhan 編

(6.2.17) *Tamnan Mūang Wangmon* (ワンモン史) pp. 247~249. 小歴1251年 (1889) の日付がある。

(6.2.18) *Tamnan Mūang Munlapamok* (ムンラパーモーク年代記) pp. 250~251 小歴1247 (1885) Mūang Munlapamok の土侯 Phrayawongra Suradet のしるした簡略な Munlapamok 史。

(6.3) *Phongsawadan Lan Chang,* (ラーンチャーン年代記), 第1巻所収, B.E. 2499本, pp. 387~432. 前述した「ヨーノック年代記」の著者 Phraya Kit (Chaem Bunnag) の手で貝多羅葉から活字にうつされた「ラーンチャン史」。ラーオ語 (ラーンチャン方言,) をもって書かれている。上古より1世王までの記述をおさめている。

(6.4) *Phongsawadan Mūang Luang Phrabang* (ルアンプラバン年代記), 第11巻所収, B.E. 2462本, pp. 1~65. Prince Damrong の解説によれば5世王の命により撰述されたものであるが著者不詳前半の部分は上述 (6.3) を底本としこれをバンコック方言に改め、

さらに4世王までの事件を補筆したものと思われる。

(6.5) *Phongsawadan Mūang Luang Phrabang* (ルアンプラバン年代記) 第5巻所収。B.E. 2460本, pp. 232~278. 著者及び著作年代不詳。おそらくは5世王の命によって撰述された各種年代記の一であろうと推定されている。原本は内務省所蔵。9世紀末に筆を起し、4世王の治世までを簡略に叙している。

第9巻および第22巻には Sipsong Panna および Sipsong Chu Thai 関係史料がおさめられており、さきの第70巻とならんで東ラーオ研究者必見の書とされている<sup>22)</sup>。

(6.6) *Phongsawadan Mūang Hua Phan Ha Thang Hok* (ホアパンハータンホック年代記), 第22巻所収。B.E. 2505本 pp. 1~43. Mūang Hua Phan Ha Thang Hok とは北ラオス、ルアンプラバンの北方地方を指し、Mūang Sam Nūa, Mūang Sam Tai, Mūang Sṅ, Mūang Soi, Mūang Yiap, Mūang Sop Aet, Mūang Chiang Khṅ などの Mūang を含む地域の総称である。本書は(1) Mūang Sop Aet Chiang Khṅ について、(pp.1~14) (2) Mūang Sam Nūa について、(pp. 15~17), (3) Mūang Soi について (pp. 18~32), (4) Mūang Sam Tai について、(pp.33~41), (5) Mūang Ha Mūang について (pp.42~43) の5部よりなり、いずれも、1886年 Hṅ 族討伐に赴いた遠征タイ軍が Mūang Sṅ に駐屯中、その司令官の Chao Phraya Surasakmontri が部下の将兵に命じて、Hua Phan Ha Thang Hok 地方各国の土侯にそれぞれの国の歴史につき証言させたものの記録で上申書 (Bai Bṅk) と共に首都バンコックに送付され、内務省保存されていたものである。

(6.71) *Phongsawadan Mūang Chiang Rung* (チェンロン年代記) 第9巻所収の B.E. 2502本 pp. 1~16. チェンロンは現在雲南省西双版納僑族自治区の首府車里にあたる。住民は Lū 族である<sup>23)</sup>。本書は1852年現ビルマ領シャン州の Kengtung (Chiang Tung) にタイが征討の軍を進めた際作成した Mahachai の Chiang Rung に関する証言録である。

(6.7.2) *Phongsawadan Mūang Lai* (ライ年代記)。第9巻所収。B.E. 2502本, pp. 22~67. Muang Lai は現在のヴェトナム民主共和国の西北隅、中国、ラオス国境に近い Lai Chau にあたりかつては Sipsong Čhu Thai の一中心地であった。本書および、次の (6.7.3) のテーン年代記は、Phraya Ritthirongrṅachet (Suk Chuto) が1886年 Čhao Phraya Surasakmontri の遠征に従軍した時、Mūang Lai および Muang Thaeng で集録したかの地の住民などの証言、口伝などを集成して記した年代記である。

(6.7.3) *Phongsawadan Mūang Thaeng* (テーン年代記), 第9巻所収, B.E. 2502本,

22) 第70巻の序文 p.iii(khq) 参照。

23) Prince Damrong が本書の序文において Lū 語と南タイ Nakhṅsithammarat 方言の類似を指摘し、その理由を1430年 Ramesuan 王が Chiang Mai に遠征した際かの地の住民を家族ぐるみ拉致し、南タイ Nakhṅsithammarat, Songkhla, Phatthalung などへ移住せしめた史実に帰し、その時移住させられた部族の大半が Lū であったのではないか、とのべているのは興味深い。(p. 2)

pp, 68~100. Mūang Thaeng とは現在のヴィエトナム民主共和国の北西部 Dien Bien Phu を指す。

なお Mūang Lai および Mūang Thaeng の住民がタイ族であるという観点に立ったタイ人による両地方についての民族誌的アプローチとして Bunchuai Sisawat, *Vietnam Bangkok*, 1961. (pp. 199~219.) がある。

(6.7.4) *Phongsawadan Mūang Chiang Khaeng* (チェンケエン年代記), 第9巻所収, B.E. 2502本, pp. 101~105. Mūang Chiang Khaeng は Chiang Saen の北に位する Mūang で住民は Khoen 族であるという。本書1890年「全銀樹」献送のためバンコックに赴いた Chiang Khaeng の貴族からの聞書に基く Chiang Khaeng 年代記である。

なお第9巻の冒頭によせた Prinec Damrong の序文は上記の4 mūang の各々につき比較的詳細な解説を行っており有益である。

(7.1) *Phongsawadan Mūang Nakhōnsithammarat* (ナコンシータマラート年代記) 第53巻所収。B.E. 2473本, pp. 102~118. Luang Anusōnsitthikam (Bua Na Nakhōn) の作。アユタヤ王朝末期からラタナコーシン王朝5世王までのナコンシータマラート史。なお本書と合せ参照すべき文献として第2巻所収の *Rūang tang Čhao Phraya Nakhōnsithammarat* (B.E. 2470本 pp.1~63) がある<sup>24)</sup>。

(7.2) *Phongsawadan Mūang Songkhla* (ソクラー年代記), 第3巻所収, B.E. 2471本, pp. 30~73. 第8世ソクラー総督 Phraya Wichiankhiri (Chom Na Songkhla, 1854~1904) が, Phraya Sunthōranurak を号していた頃の作。本文の叙述からも明らかのように, 本書はもと「Na Songkhla 家 (Trakun Na Songkhla)」の家史の編纂を目指したものであるが, その内容は Sultan Suleman (?) のソクラー建設にはじまり, 第4世ソクラー総督 Phraya Wichiankhiri (Thiang Seng) に至る「ソクラー年代記」に外ならない。なお Na Songkhla 家は, 1904年本書の著者が他界するまで8代129年に亘りソクラーを治めていた訳であるが, 第5世以後の歴史については, Phraya Sawatkhiri Sisamantratnayok (Yen Suwannapathom) の筆になる本書の続篇を見る必要がある。これは「史料集成」には収録されておらず別途独立した Nangsū Čhaek として刊行されている。(たとえば B.E. 2501 に刊行された *Phongsawadan Mūang Songkhla* は, その第1部が, 前記「ソクラー年代記」で, これはその第2部として収録されている。)

(7.3) *Phongsawadan Mūang Songkhla* (ソクラー年代記), 第53巻所収, B.E. 2473

24) 「史料集成」には集録されていないが, 1962年ナコンシータマラート候の血筋を引く Chao Phraya Bodithōn Dechanuchit の葬儀の引出物として *Ruam Rūang Mūang Nakhōn-sithammarat* (ナコンシータマラート史料集成) が編纂刊行され同地方史研究家の間で珍重されている。本書には上述の2書の外著者不詳のナコンシータマラート史, 5世王, 6世王の南タイ巡幸記録等ナコンシータマラート関係の文献10篇を収録している。

本, pp. 1~101. 第5世ソクラー総督 Čhao Phraya Wichankhiri (Bun Sang. 1796~1965) の著作。2部に分れ, 第1部 (pp. 1~39) は1845年に, 第2部は1859年にそれぞれ書かれたとある。

(7.4) *Phongsawadan Mūang Pattani* (パタニー年代記), 第3巻所収, B.E. 2471本, pp. 1~29. 第8世ソクラー総督 Phraya Wichiankhiri (Chom Na Songkhla) が Phraya Sunthoranurak を号していた頃の著作 (cf. 上述 7.2.) ソクラに在住していた著者が, かの地で得た見聞を「ブラドレー博士本年代記」<sup>25)</sup> と照合しつつ綴ったという「パタニー州年代記」である。狭義のパタニーの他ジリン (Mūang Yirin), サイブリー (Mūang Saiburi), ラゲ (Mūang Range), ラーマン (Mūang Raman), ヤラ (Mūang Yala), およびノンチク (Mūang Nongčhik) についても言及している。記述は1世王から5世王の治世半ばに及ぶ。

(7.5) *Phongsawadan Mūang Phatthalung tang tae Samai dūkdamban thūng Samai patčhuban* (上古より現代までのパタルン年代記), 第15巻所収。B.E. 2482本, pp. 1~63. Luang Si Wōrawat 編。4章に分れ, 第1章は伝説の時代, 第2章アユタヤ時代, 第3章トンブリー時代, 第4章ラタナコーシン時代。

(7.6) *Phongsawadan Mūang Phatthalung* (パタルン年代記), 第53巻所収。B.E. 2483本, pp. 128~134. 小歴1212年 (1850), トンブリー朝時代のパタルン侯 (Phraya Phatthalung) の2人の息女からの聞き書きをもとに Mūn Sanit Phirom の編纂した「パタルン年代記」。

(7.7) *Rūang Tamnan Mūang Ranong* (ラノン史), 第50巻所収。B.E. 2471本 pp. 1~109. Prince Damrong 編。下記の6章<sup>26)</sup>より成り, 巻末に Na Ranong 家の系図をのせている。

第1章上古, 第2章 Ranong の第4級州 (Hua Mūang Čhattawa) 昇格, 第3章 Hua Mūang Tawantok への総督任命, 第5章5世王 Ranong 行幸, 第6章6世王の Ranong 行幸。Prince Damrong が, 各種の古記録, 政府命令書等に散見される Ranong 関係の記述をまとめ, これに現地踏査の結果を加えて編纂したラノン史。3世王以降の記述が詳しい。1912年まで。

(7.8) *Phongsawadan Mūang Thalang* (タラーン年代記), 第2巻所収。B.E. 2470本, pp. 64~78. Mūang Thalang は南タイ, インド洋岸のプケットの島中央部に位し, 現在プケット県タラーン郡。本書は Thalang の地方行政に関係した Nai Loek, Nai Sūk, Nai Sūa, Nai Sithong および Luang Phetkhiri Sisamutwisutthisongkhram の5名が「古老の談話および自らの見聞に基き」叙述したというタラーン年代記。大部分は1841年に書かれている。

(7.9) *Phongsawadan Mūang Kalantan* (カラントアン年代記), 第2巻所収。B.E. 2470

25) 拙稿「タイ語文献について」(2)『東南アジア研究』第2巻第1号, 1964年9月 p.14, p.21 参照。

26) 事情は不明であるが, 筆者所蔵の B.E. 2471本では第4章が目次, 本文共に欠けている。

本, pp.131~148.

(7.10) *Phongsawadan Mūang Trangkanu* (トランカヌ年代記), 第2巻所収。B.E. 2470本 pp. 113~130.

(7.11) *Phongsawadan Mūang Saibari* (サイブリー年代記), 第2巻所収。B.E. 2470本 pp. 79~112. Saiburi とは Keddah のタイ名<sup>27)</sup>。

以上の4篇は、いずれも Sala Luk Khun (旧制度下の首都高等裁判所) 所蔵本による旨の註記がある。

(8.1) 「史料集成」には上記の各地方のほか5篇の「カンボディア年代記」が集録されている<sup>28)</sup>。

*Phongsawadan Khamen* (カンボディア年代記), 第1巻所収。B.E. 2499本 pp. 165~268. 1855年4世王が Khun Suntqrawohan, Phraya Thammathibodi および Phra Senaphiçhit の3名に命じてカンボディア語からタイ訳させたもの。1869年5世王の命によりはじめて上梓された。

(8.2) *Phongsawadan Mūang Lawaek* (ラウエーク年代記), 第4巻所収。B.E. 2458本, pp.21~28. カンボディア王 Phranarai Ramathibodi (Ang Eng) が1796年, 1世王に献上した「カンボディア年代記」。Prince Damrong の序文によれば, 本書の標題に *Phongsawadan Mūang Lawaek* とあるのは, 原本が Mūang Lawaek (Lovek) に由来するためか, あるいはかって Mūang Lawaek がカンボディアの首府があったためこの語をもってカンボディア全体を指し示すならわしによるかのいずれかは不明であるが, 内容は *Phongsawadan Krung Kamphucha* (カンボディア年代記) というべきものである。Luang Photçhanaphiçhit ら4名の共訳。

(8.3.1) *Phongsawadan Khamen Yang yq* (カンボディア年代記略), 第71巻所収。B.E. 2481本, pp. 95~103. 主として1世王から4世王までにおけるカンボディアとシャムの関係史を略述している。著者不詳。

(8.3.2) *Phongsawadan Lawaek chabap plae C.S. 1170* (小歴1170年訳本ラウエーク年代記), 第71巻所収。B.E. 2481本, pp.1~69. 記述は1575年から1618年に亘っている。原本はカンボディア語で Samut Thai 3巻, 1808年タイ語に翻訳された。本書は新しい王朝の始祖となった Phraphuttha Yqt Fa Çhulalok 王(1世王)が新官制を定める際の参考に資せしめるため翻訳を命じたものであろうといわれる。

27) 本書に関連し, マライ語の「ケダ年代記(Marong Mahawangsa)」の James Low による英訳が1908年 Bangkok Waçhirayan 文庫から出版されていることを附記しておく。

28) タイに紹介されたカンボディア関係の文献解説としては「史料集成」第71巻所載の *Bangtük Phong-sawadan Khamen* (カンボディア年代記覚え書) がある。B.E. 2481本, (pp.kq~chq[=i~viii])

(8.4) *Phongsawadan Mūang Phratabong* (プラタボン年代記), 第16巻所収。B.E. 2475本, pp. 1~12. 5世王が編纂を命じた各地の年代記の一。Phratabong 総督 (Phu Samret Ratchakan) Čhao Phraya Khathathq̄nqh̄ramin の作。

(9.1) *Phongsawadan Phama Raman* (モーン年代記), 第1巻所収。B.E. 2499本, pp. 269~386 原文はモーン語, 録事局長 Khun Sunthq̄rawohan と3人のモーン人翻訳者が1859年にタイ語に翻訳したもの。記述は小歴522年(1160)から3世王の治世に及んでいる。

(10.1) *Phongsawadan Yuan* (ユアン年代記), 第71巻所収。B.E. 2481本, pp. 104~109. 本書の序文 (Banphanaek) には「丑年第5年(1793) Phraratchamontri, Khun Sisena, Khun Rachawadi 謹みて *Rūang Mūang Tang Kia Anam Kok* (東京・安南国記) をタイ語にうつし陛下に奉呈申上ぐ」とある。本書は Nguyen Anh がバンコックに滞在していた頃同王が Ang Pet Trūng および Ang Pet Čhat<sup>29)</sup> の二人に執筆を命じ, 1世王に献上した「安南年代記略」であるという。

(10.2) (*Rūang*) *Phongsawadan Yuan* (ユアン年代記), 第28巻所収。B.E. 2466本, pp.1~15. 港務卿補佐 (Čhao Khun Phu Chuai Krom Tha) が, 上述(10.1)を底本として編纂した簡略な「安南年代記」という以外に詳細は不明である。

「地方史」, 「地方年代記」はこの外にも相当数字在するようであり, 単独に刊行されているものもいくつかを数えることが出来るが, 本稿では「史料集成」中に含まれた主として *Phongsawadan*, *Tamnan*, *Khamhaikan* と呼ばれるもののみを抽出し, 簡単な解説を加えるにとどめた。ここにもれた「年代記」については又別の機会に紹介したいと思う。なお本稿中「1世王」「5世王」などと略記したのはタイ語 *Ratchakan thi 1*, *Ratchakan thi 5* などを訳したものでいずれも現ラタナコーシン王朝の諸王を指し, 一般にラーマ1世, ラーマ5世と呼ばれているものと同一である。

後記——「年代記」等にあらわれる地名の検索に便利な「タイ地名辞典」がこの程タイ国アカデミーの手で完結出版されたので紙面の余白をかけて紹介しておきたい。

*Akkharanukrom Phumisat Thai chabap Ratchabandit-sathan.* (アカデミー版タイ国地理辞典)  
3 vols. B.E. 2506-7 (1963-64), Bangkok.

がそれである。本書はもと1933年に *Pathanukrom* (国語辞典) の別冊として計画され, 一部が刊行されたまま長らく中絶していたかの「地理辞典」の継続出版とも言うべきもので, 1954年 Phraya Anuman Ratchathon (Rajadhon) を主査とする専門家委員会に設置されて以来9年余に亘つて編纂が進められて来, この程ようやく完結の運びとなった。全3巻の内第1巻(376p.)は「タイ国地理概説」とも言うべきもので, 地勢, 気候, Flora, Fauna, 資源, 交通, 民族, 風俗習慣の8章より成る。第2巻(pp. 1~766) および第3巻(pp. 767~1693)はこの「辞典」の主部をなすもので字母配列順に従って中項目, 小項目両方式を併用しつつ地名の解説を行なっている。多数の写真, 地図が各処に挿入され, 利用を一層便利にしている。タイ国アカデミー (Ratchabandit-sathan)から出版されている。

29) タイ文字よりの音写。